

おはせさんが、とまじってあんなにうろたえていったのが、ふしぎでならなかった。

朝になって家の着がみんなで、とて入ってしまたんやろかと思つて、山の方をみると、山のはらをおはせさんが歩いておるのがみつかつた。それでとんでいってみると、おはせさんは、着物のすそはほんのぼろにやぶね、からだじゅう血まねになつて、ほぜつとつておぬ。そこであわてて家へしねまじすと、おはせさんはうしろにこつて家へあがりこみ、火はちにあたつてゐる。からだのてあてをしてやり、あたかいいもがぬをつくつてやるよ、おはせさんはよむしたで食へ、それから、まじいぬわとこつて、おれいをしてかえつていった。

とつちやうゆつへは「晩中、山のなかを歩きまわつておつたにちがいないが、あのおかしな血じまからかんがえてみたよ、まじいぬでもついたのぢがじやろかよ、みんなで話しあつておつた。

するとそこへ村の人が走つてきて、おとみはおさんが、山のむじの道でたおれて死んどると知らせしてくれたので、びっくりしてみんなでそばへ走つていった。なんでそうなつたかしらんが、大人の人がみんなをよびにいつとるあいだ、まだごもやつたわしが、死んでおはせさんのそばでみはりをしておつたが、おはせさんの顔がきつねにみえ、

いままじたちあがってまはせなかな、いんげんをえりておったまなせ。このおはまなま、まじねじかたてとい
うじんなことになったんぢや、あてでみんなは話してしたが、ひどいことをしようたまなせ。そんなことがほんまに
あるんぢたら、今もあのおはまの、この、そんなことがてんどのつなつたといみたら、まじねじまはつまん
ま、ほんまにまじねの、いわちがが、つじいことになるわけが、そんなら死んだおとみはあを、とないしてあ
ないなつたのか、じつに、わしが、目の、みとるだけ、とんとわけがわからんといことになるわい。

